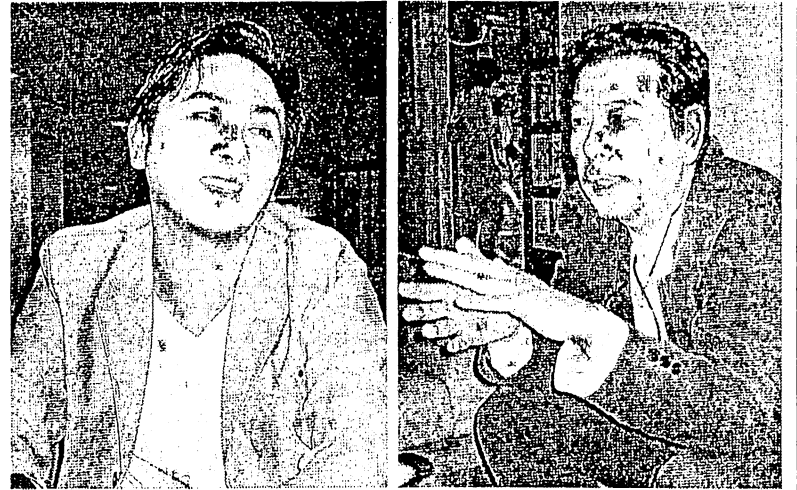


文化

日本的なるものを相対化

わび・さび・幽玄は、日本文化の代表格として疑う余地がないと考えられているが、本当なのか。そんな疑問から伝統的な美意識を歴史的に検証し、「日本的なるもの」を根本から相対化する研究書を、このほど国際日本文化研究センター（京都市西京区）の研究者らが発刊、多方面から注目されている。



「日本的なるもの」について論じる鈴木教授（右）と岩井・研究部技術補佐員（京都市西京区・国際日本文化研究センター）

わび・さび・幽玄を検証

本は「わび・さび・幽玄―『日本的なるもの』への道程」。編者を務めた同センターの鈴木貞美教授と岩井茂樹・研究部技術補佐員（学術博士）を中心に、計六人の研究者が執筆した。和歌、能、茶、俳諧などに関する評価の変遷をたどり、わび・さび・幽玄が、日本の美学の核心として語られるようになった過程を解き明かしている。

■日文研教授らが研究書出版

同書によれば、わび・さび・幽玄という言葉は中世に美意識を意味するようになったが、三語セ

の根本理念が語られていた。茶の湯を国際的に知らしめた岡倉天心の「茶の本」（一九〇六年）でさえも、その核心は「渋み」と語られている。岩井氏は「わび・さび」は、周辺の茶室や茶道具を形容する言葉として使われていた。とりわけ、明治から大正（一九二〇年代以前）にかけて、茶道の中心理念を表現する言葉としては用いられない」と指摘。高橋龍雄の「茶道」（一九二九年）が「わび・さび」の価値上昇に大きく貢献し、創元社の「茶道全集」の発刊などで完成をみていくと説明する。「文化

なるもの」に関心が集まった。中世の歌論や世阿弥の幽玄が称賛され、わび茶の精神や芭蕉のわびが説かれたという。鈴木教授は「過去の文献を詳細に検討していくと、日本人の心の中に『日本的なるもの』が脈々と受け継がれてきたとする見方は危うい。どの国でも純粋な文化というものはない。他国と対抗したり、他国のものを取り入れる過程でつくられていくものではないか」と語る。安易なナショナリズムが高まる風潮に二石を投じた一書と言える。水声社刊、六三〇〇円。（文化報道部 二松啓紀）



水声社から発刊された「わび・さび・幽玄」

ットではなかった。セツトにする習慣がつけられたのは一九七〇年代後半。明治期には顧みられず、過去百年の間に日本の文化や価値観が劇的に変わり、評価が高まったという。

例えば、現代人の多くは「わび・さび」「イコール」「茶道」という図式を常識とする。しかし、岩井氏は否定的な見解を示す。一六〇〇年から現代に至る茶書をひもとくと、「わび・さび」は一貫して茶道が目指した根本理念ではないという。岩井氏によれば、元禄期の茶書には「わび・さび」を語るものが多いが、江戸時代を通じてみると少数でしかなく、明治時代は「簡素・質素・質朴」、大正時代は「和敬清寂」という言葉で茶道

このほか、松尾芭蕉の俳諧論の「さび」は江戸期を通して評価され続けただけではなく、元禄期には「粹」や「いき」がもてはやされた。また、能楽の聖典とされる世阿弥の「風姿花伝」は大名家に秘せられ続け、公刊されたのは一九〇九（明治四十二年）だった。当初は若に知識は不要とする能楽師から否定的評価を受けていたという。鈴木氏によれば、「日本的なるもの」が爆発的に論じられようになったのは一九三〇年代。団体明徴運動が国会に持ち込まれ、天皇機関説が否定された三五年に「日本的